ル 2
3081

禾利幹漂流記

鍛冶橋第箕作氏記

初漂流せしより亜墨利加にて至りサンホセと申所

しらこの話

天保十二辛丑の秋八月兵庫西宮内町中村屋伊兵
衛船永住丸とて千石積廿八端帆なる黒沙糖
線香等を積并粮米十五俵程積入乗組の人数ハ

沖船頭　紀州周参見　善助

表廻り　阿国　初太郎

鍛冶橋集作氏記

3081

昭和廿四年一月十三日

初太郎兄
七太郎

伊豫
伊之助

紀伊
利三郎

伊豆
万蔵

奥州南部
要蔵

同
三右衛門

播州明石東垂水
岩右衛門

能登
宮次郎

同
摠助

九州
多吉

紀州
弥一郎

以上十三人にて同月廿三日兵庫出帆いたし九日十日お(サ)
摂国(カミノ)浦賀(ウラガ)の湊へ着いたし出(オホサカ)の法段渡り受け海岡屋伝(イモ)
塚(ヅカ)越太郎方へ幕(ゴ)呉(ドウ)七千俵水揚(ミツアゲ)いたし翌(ヨク)十五日喫(キヤワニシ)[illegible]よ
浦賀湊出帆し奥(アウ)州南(ナン)部(ブ)へ志し乗りしが東風吹出
廿一日豆州(ツシウ)の方へ乗戻(ノリモド)し同廿三日大(ヲホ)網代(アジロ)の湊(ミナト)へ

入船し十月四日ニ同所出船房総の沖を乗通り四十
二日夕方下総の国犬棒が岬の沖ニいたり地方を離るゝ事
五六里も有る所ニて奥の海へ乗かゝりしへきに沖合風
宜しからず兎角して洋中ニ漂ひ居る事しばし
亥の刻と思しき比より西北の風烈しく吹来り逆浪
強盛なる故帆を下げて暫し凌しかど子刻比
よりは実ニ凌ぎがたくなりし故荷物を少々海中へ投捨
翌十三日ニ至りても風波烈しき由又々荷物を
捨る十四日の相を働きけれども少しも凌ぎがたく見え
けるゆへ各談合して漸く凌ぎ二方のちからを書写
神鬮とし一同ニ祈念して是をひらくに帆柱を切る
べき神鬮ニ取當り依てその刻斧を持て櫓の
上へ登り是を切る十ニして二分ほどまで切込けるに
風波の為に動揺するによつて檣忽ち折れて海へ落ぬ
其時艫の方へ碇を二挺下げ太き苧繩足筋を付て
引しゆへ舟のたやすく流るゝを防ぎ又飯料を算へるに

粥米三俵なるを積みたりしが去秋より十三人の食料に
米壱升を粥として食し唯神の助け給ハん事を祈るより外に
詮すべき様なし十九日朝巳刻頃よりいさゝか風凪ぎ
各少し力を得たりしに午刻より又辰巳の風はげし
其夜亥の刻より雨甚しく烈しく吹き雨も大に降
来りしが翌廿日暁卯刻よりまた西北風に変じて強く
吹き流し卯辰の方へ漂ひ流る尤絶えず吹拂れし
同廿一日に至りて地方の山々見ゆるなれども其心痛譬ふる

に物なし十二月七八日比まで同じ風荒く吹続けるが此
時迄も尚絶て飯料も尽果たるが同十日比より舟の
外艫破砕し戸立動き海水船中に漏入ことおびたゞしく
十六日比に至ては舳の方破れしかば端船を解放して是を
捨て七挺有し櫓も追々切捨二挺残りしが六筋有し
苧綱も一筋となりまた三筋断れし漸く綱を二筋残
りしが又飯料櫃食尽して今は積込たる酒砂糖
などを少しづゝ食し雨少き時は呑水も乏

しき坂ゆゑにや垣も今も渡り坂にて気力次第に衰へ十ばかりに
働くことならず一向神仏を祈るのみなりし方位を勘へ計る
に卯辰の方へ九分巳午の方へ也一分ばかりなるを流れゆくに
其年冬の間は始終西北の風烈しかりしが棄て丑寄
翌る程壬寅年の春となりぬ南く風のなく日も有
此ずも茫々たる大洋の面雲と濤とを見るのみ何れの島
に似たるものさへもなく心細きこといふばかりなし海の
静かなる時は常に帆綱を縫ひ針を曲げて鹿の角にて

松の木此節などにて鉤に似たる形に作りて鰤九疋乃
釣り具鉤糸を作り海に潮の色は或は黒く或は白き
青くあるのを見て而に嬉しからむもなく高き阿
房鳥残りたるのを見るに各思ひ思ひに日本の内にて東の
端にいたく吹払はるるは卯辰の方へ専らに流れし
ならんとて所詮日本には帰ることあたはじと思ひも及ばざる
三日の頃より海静かになりしに鰹あまた釣り溜へ
今は食糧もつきし東南の風続きて急に南へむけて帆綱作り

西北の方へ馳るなれども且てけひ日本の地へ近づくなれども
何れも神明の加護ありてや此程の艱苦を免れしかど一人も
病やみ死亡の患なく却て雨露を受て渇を助け
大魚をも時々得て食料とし又船の包板をせんじ
又貝の類は希に得る事ありても飢を助る其命を繋ぎ
偏に帰るべき志にてひたすら何れの山と互に心を励しあひけり
凡海上に漂ひ流るゝ事百二十日余里数も幾千里といふ
を知らず翌歳二月中旬に至て孤嶼の辺の日より

有る日或時やぐらの上にて四方を眺望居たるに
はるかに西の方に当りて遥に一艘の船を見かけしが
かゝる洋中にて見えし船なれば外国の船なるべしと又は薩摩へ
より琉球へかよふ船なるべしなど評じ合る内次第に近
づき帆数の多き船見え来り程ちかき黒船なれば思ひ一団に
怖畏しく船中に恐れ騒ぎける内其船漸く近寄
来り程なく四馬関見え居しが遂に端舟を
卸し一艘に乗りて阿蘭陀の仕方なる人五六人来り

三十日計の鉄炮六挺づゝ備へ而再三(サイ)本舟の所存とは
めぐらし心(コヽロ)をやがて打殺して鬱(ウツ)憤をはらす如何なる乱暴(ランバウ)を
逢(アフ)ならんと恐(ヲソ)ろしければ日頃いかなる仁義(ジンギ)も通(ツウ)ぜざれば
只一同に掌(タナゴコロ)を合せ拝(ヲガ)み居るを彼等も大いに飢渇(キカツ)の
さまに弱(ヨハ)りたるを察(サツ)したる体にて彼等船より指(ユビ)さし何やら云へ
来らせ合図をも与(アタ)へんといふ様にて米を敲(シヽ)へ又船中
より積みし酒四十樽砂糖(サタウ)十七樽并に鍋(ナベ)釜(カマ)竈(カマド)までも箸(ハシ)茶
まで彼の船へ積みけるを是を争(アラソ)ひ留めんとすれども飢(ウヱ)ぬれば力

なくなく只僅(ワヅカ)に命を継つなぐべきものを取られける酒砂糖なぞは
さへ奪(ウバ)ひとられては所詮(シヨセン)本船に居たりとも命ながらへがたしと
思ひ是非(ゼ)なく皆々衣類も身に付け送りて
本船を棄(ステ)て彼船へ乗移(ノリウツ)りければやがて米の飯の握(ニギ)り
なるに菜(ナ)の塩漬(シホヅケ)などを持来りて各々に与へて食はせけるを
押しいの百日計の間も穀粒(コクリウ)を見る事もなかりしに付
まして尚更いつもの飯のことなるの夢(ユメ)を見る程なれば
船中の者ども只観々て此事のうれしく思ひ哀(アハ)れを一同よろこび

彼地へおもむくとも如何なる浦(ウラミ)じあつて言何ひけるに
はかりし此舟に助けられ候一握(ニギ)りの飯を参らせる時は
千余の上(ウヘ)かくしてたとふる物なし振(フリ)かへり見ず舟
端見しとて破(ヤブ)れ損(ソン)じたる事目も当てられずよくも今
迄てかゝる船にて何ともなされず今は碇(タダ)も沈(シヅ)めなん
見ゆるとの体心ぼそくも風待て数千里の海を走(ハシ)り
再び日本へ帰らんなどゝ思ひけるかなよく〳〵我ながら浅(アサ)
ましく思ひけるに此度助けられたる船は異国の船にて

△瑪泥爾剌(マニルラ)ハ即チ呂宋国府ニシテ伊斯把泥亜国ノ所領ナリ

知らざりしが後に聞けば伊西把你亜(イスパニヤ)の舟なりしよし
長さ凡十三間計帆柱(ホバシラ)中本弥帆(ヤホ)柱(バシラ)三ツ帆数十ヲ計
かつ又端舟(ハシフネ)三艘有之船中の形勢(アリサマ)大抵(タイテイ)蘭船(ランセン)に似て
同じからず又乗組(ノリクミ)人数六十八人船頭と云者二人有て
伊西把你亜(イスパニヤ)の者のよし眼中赤く髪も紅毛(ヲランダ)人の如(コト)くなら
其他の舟子は皆瑪泥爾剌(マニラ)の者のよしにて眼睛(マナコ)を
日本人と同様にして髪も黒き者なり偖此舟に乗
移りて後六十日計の間東に向て帆行(ハセ)しが初め五三日

の程に三度づゝ食事させけれども正体もなく懺しける
而後ハ舳艫をもて十三人残らず二タ組にわかち船中
の諸用を使ふ二時づゝ交番して昼夜間断なく
其法いと厳酷なれバ少しも怠る時ハ綱を振
廻して呵責す無念なれども寸隙もなし十日余り
過ぎてあるに船中に乏しきまゝや是等だもかくハ
呑て日本人ハ又一滴も飲ざれバ咽かわき身苦しくて
疲れ弱るばかりに漂流せし間なれども其上病気を

少しも食を与へざれバ猶更気力衰へて握飯を
見るよりも否なる体くなるをさへまげて検責られて
帆柱の上の働をせよなど命じられバ日本人ハさ無う
の働もしうるまじき事なれバさまざまに侘しかれど
漸く許されて一二間ばかり何とも上らるゝに落ちて倒るゝ
程なれバ舟底などに忍びて其の息を
休めんとすれバやがて見付て太き棒にて突き
出し打抑して責つゞけかくのごとく苦しめらるゝ

さて此度初め助けらるゝ時のはなしは三年にて伝へられし
しくのとおもひしかば五十日計にもなりしが漸一回に
髪を切て海に流しぬ此間舟の頃なく常に時々て
一昼夜に百七八十里の速さ日もあり百里内外を走ると
ぞりとぞ見え又舟底を洞にして包める塩ならで魚などを付
とらふかいるかなし漸く六十日だけには四月中旬に
至る比式日の未刻ばかりに左の方に国の見ゆる所もあ
付けるに則碇をおろしけるに地方なる三四丁ばかり沖なり

かくてある時此所砂濱にて汀なる五丁程上に山あり見えし
所に船人共端舟にて陸に上り買物などする躰に
陸なる人来りて船人を呼び出し交易する様子見え西
揃ひて様の子細は兎も角善助初太郎弥一郎多吉利七郎
伊助惣助七人の者を端舟に乗せ上陸すべしとの事
なれば船中より持て薬も取出し国のもの此度再三
いふ事なれど船人共大に憤り善助を打擲なして強て
催促なしける故皆々せん方なく端舟に乗り移り

浜辺に漕付る時 同じも速に上りて 櫂をも捨
何ぼうかすべき形勢をなしけるは 各急怖して急ぎ
陸へ近よりぬれど 獨舟を重ね漕返すと 軈て本船の
碇をおろせる声 一同に真帆をかけて 外方を志し 磯に
呼と七人の水夫 浜辺にて 茫然として 在りしが 初太
郎善助中にも 今日碇を卸せし時 陸の方に遥に
白壁造りの人家あるを見たるに いと美しく 三十許まで
見えけるは 是の上の手を揮ひて 皆 其人の

者のいふやう 是こそ慈悲もなく 我々を使ひ苦しめける
舟人の心よ 引競べみれば 此陸に有る人もいかなる邪見
の心を持てる者か知らず 上りての後 舟人と陸の者と何
かれ さんなく 語らひける様もあれど 定めて悪き工み
為しして 我々を此所に捨置き 此陸の人に殺させん
となれば 成るべし いかでか此所より かへり見れ
漸く助かりける命をも 又失ふべきや 唯此浜辺に船を
始めて 帰るまでは 土地の様子 物のさま 何なりとも

終に錯ひ入るゝ上にて兎も角もなすべし去ながら
萬里の波濤に隔りかゝるなれば我国に来りて衣食の
縁も離れ走る如く隠者に捨られたる所詮助かる
べき命にも非ず、とても溺るゝとて諸大寄に捨げらるゝ浮木
にも非ず両人又中々猶ほ又しく殺さんとの謀に何れとも此志を
國にて何方へも逃げ行くべき假令他国に常に逃るゝとも
明日をも思ひ殺さるべし此世も逃れぬ命ならば一極を延ぶ
とて何よりかなるべき事にて心強く若しや危ふく早く

殺さるゝ事は何しかしめ家へ帰して是非に行べし
若や此度の人慈悲何のとて某等多分なる体なれど
早く所へ来るべし若し再び謀らるゝ時は家を
害せられたるとおのれ名誉慢何事も約束して引
分ちて目前に名ずる家へ行きて三丁計ありて人を
のせて両手両人此時は者のけしなば向ふよりも
同じく感じ彼にもつきて目前に両人ともに大に
驚きたる体なりしが両人を引つれて三丁程も行き

今宮や都何る所よいはる和かも広き体のたとへその改
さつまひゐるよしく阿蘭陀人の根なる眼をとらしる人は
人ぞそ集をなるら皆しう白き半紙昆布る侍なりけれ
言語通ぜざりしを漂流親昔の身にすまし色くとも今
みるく知らせられど甲斐なるを見へく先あ今ぬは一様
にぞ解しめ四国の人なるやとて仕形して見せるは日本
日本と毎三唄なるをしかぞ也みして見へてハツポンくと
いふく今あしらる体しあ人又今女今の若の漂泊に

強うも依るよし後に真似まて言はせらせど彼の旅に行あひ
しるとき人の男付添ひて又浦の人も戻りをも引連れ
初の所へ立帰りしを中にても色の大樹のもとに牛の皮
敷二枚しきて七人並び一所に胡坐して根深くなりて
二三人の人四申らん用事何ぞ告げに親疎も無き色に
紛れぬべかる故すこぶる殺しに来るならん今もいかなる
是を閉めぞ恐らんとて恐ろしくして志ども滅び絶えむ
すべて銀をへて 後に聞けば言葉を数を多く二両置きける故に すまし給ひ 放牛に知らず見向くとすると云 三十様

四月中旬ともなれば日本の七月頃の暑気にて暑さ強し
されども蚊も多からずありし 路にて程の明渡るほど二軒
の家あり 婦人出て七人の者を迎へて各々その
家につれ行き コッピイといふ茶のやうなるものと砂糖を
入れたるを壱人へ一椀づつ出しける 相三人にて足を踏
引ふけて 家の内にて入れ仮に軒をさし懸けて
萱のぬきをみて日覆を造りて 四方の皮を以て
合せて無く 唐黍の餅を塩漬にする 獣肉と芭蕉の

実なども食わせたり 此の島の家居は
芭蕉の実は赤く熟したる
を食すに甘きことこの上なし
壱軒は土蔵造りにて壁の厚さ三尺 長さ七間奥行
四間高さ壱丈計 東向きに戸口を設け 屋根は
萱葺なり
萱の葉は菖蒲に似て長さ壱丈余 幅壱寸
斗 拾ずつ一把にして 上を覆ひ葺なり
家の内は
土間にて 床の上に更紗木綿の蒲団を敷き 臥所とし
今一軒は茅葺の家 竈を据えて 台所とし 鍋又は鉋
類のぬき物にて 茅を以て一軒を掘建にし 壁をつけ
家根も同様なり 此家には十人ほどにて居住する人物

ハヽカリホルニ于ハ漢音
譯ノ南利波尓泥亜
ニ作ル北亜墨利加地方
東紅海ノ傍ニアリ伊
斯把泥亜ニ属ス
寛許

毛色白く髪黒く眼の色ハ日本人に同し　但土蔵送呈
の国に居る黒人と違ひ此の者人ハ西洋同断の人物
なり　此所ハアメリカ洲ハヽカリホルニ于の国にてカポサンロカといふ所に
山下の濱邊少く精き所にて見申　二疋の豚鹿羊乃
類殊に多く飼ひ置き人家多き所へ商ひ渡世とする
侍まて殊に多く園を設て其中に飼ひ置ける此所に
二日留りしに其間船右案内にて砂糖抔いろいろ飲食を食事ハ
魚と鶏とを菓子抔食ひ三日目に至りて此者より五百石積計
の船に熟肉抔豚の肉抔積入れ七人の者抔も
世話をなし世話にて何方へ送るへき侍なるも此船小さければ底
無綱にて包ミ其儘の所に西洋船にかけるけれと帆柱を
取本建て船子とも七人乗せて此船にて東に向ひて走り
三日目の正刻てるに一ツの濱邊へ着て此間五十里計
何も見えす夫の方を地續き白濱にて山も連る
兄弟屋形濱邊へ鞍置馬十二三匹乗来りて此所の人
物共の所に同しく馬鞍も日本にてかけるにて　但鞍ハ白木にて

銀の金物をかけらし各馬に乗られ口付ある人ハ付添(ソヒ)申し中にも馬の
尻(シリ)に乗られ候者もあり 又船より上陸の節ハ同じく
附添(ツキソヒ)此方へ申し 初めや我家に居る者の内一人
同船にて来りけるが 是も馬に乗り 此方へ急(イソ)ぎ候侍
なるべしとかく 家々より手段役所などへ召仕(ツカヒ)ならん也
推量(スイリヤウ)せる 抑其年十七八才にて 人家七八十軒程の許に
いたる 其所をバハカリホルニヤの国 サンホセといふ所のよし 此亜(ア)
墨(ツ)利加(リカ)別の国 メヒコといふ都の支配(シハイ)の地なる 突当(ツキアタ)りの

「メヒコ」ハ即チ墨是可(メキシコ) [illegible]伊斯把泥亜ノ属 [illegible]

家に行きたるにて 役人侍の人三人居る 別(ベツ)に馬を引かへ [illegible](コシヤウ)
綱をさして 側(ソバ)に召居り 此方の馬船に移させし 六人の内
七左衛門万兵衛両人気に居る故 大に驚き 振子いろいろにして
見せけるに 両人共に不残 彼船出帆 泉へ水縄(クミ)給へ上方
乃るより 家々に持出候へ捨(スヂ)て 何国ともなく行く故
暮るまで 出所へ来りて 養(ヤシナ)ひ置かるとなれとも 夜に入りて 各(タガヒ)
まての娘衆(シユウ) 共に船中に移る 同人の肴 是も此は余
乃る国よ 町人侍の者 十人計来りて 九人の者をとも入れ

思ひ〳〵に連帰る中にも初太郎と云人ハ見たる所ハ年
齢五十歳たらずに見ゆる人品よき人来りて連帰りし
するに此家の主人の妻と思しき婦人みえず寡婦なる由
相問しきが何れの家にも留置べしと不便なりとて其の
人々互に暫く争ひしが遂にかの人無理に初太郎を
伴ひて其日中に帰りき其家に至りたる此家の体
を見るに長さ五間梁間三間斗堀建造りにして白壁を
つけ屋根ハ萱葺なり家内ハ男女十人合住に下女二

人下男壱人なり家の内は都て土間にて各壱人宛の所
床をこしらへ其上に蒲団を敷て寝る人物初めの所に同く
色白く髪黒く男女とも美麗なる方なり衣服合羽
も初めに同じく唐黍小麦獣肉を糧とし飯却る好き菜
に砂糖を入たる飯をパンと称し
パンは小麦の粉を鶏卵にて捏りカステイラのごとく焼る物
男女とも腰靴をはき男子の沓ハ牛皮の袋靴を用ゆ底を
三枚重にするは暑気はげしくして砂地焼るゆゑ
底を重ぬるなり且又鹿羊の皮を用ゆ土地北極

出地四十五度計ニ当リ暑気甚しく砂の色迄も赤黒
く焼る程なれば蒼一丁計りをも跣にて行ば難し
き程なれど日々巳刻計より涼風南方より吹来る故
思ふよりは凌易きよし実に造化の自然を思ふべし
又男女とも四季同じく渓川に往て水浴するを
常とす今もなんせば女ちは髪懐ふかし初太郎は
始め九人の者皆腰より上は前の風に依て衣服を着る土人の
姿となしたるを初太郎が寄宿せし家の主の名を三ゲリ
チヨウナイと云（三ゲリを名乗てチヨウナイを苗字なる名を上につけて呼ぶは此所の風俗なるを）妻の名は
イナシヨと云ふ二男三女あるを男子の名はブラス長女はアン
トウニヤ次女はセンシシヨン末女はヘソス幼男はアゴステンや
いふ彼もいかなる因縁にや有けん三ゲリチヨウナイ初太郎を
憐み出たる大方ならず衣服なども皆新らしく縫て
着用せしめたり初めて衣服改まりて町へ出一日の者
多く見る時は衆寄りて羨ましくなん善助は連れ帰りし
人も同じく西洋は加へ何とも婦人なき家なる

しまへ初太郎が愛せられしわざなるべしとぞさて此
あたりの家事は徐国よりも少しは優るやうにてよく安楽にて
暮しける間学力平生は済さるゝ七人の七人は然れば
山より入りて家の薪を採り或は田畠を耕す助けをなし
又は水を汲み庭を掃などして日々相送る少しの暇
ある時は九人共一所に集りて故郷の事を咄し合
のみ他事なし扨ミケリチヨウサと申す者は何を思ひしや
志ありけるにや初太郎にアメリカの語を教へんと思ひけん

外国の詞を覚へさせんとて一夜もいとはず
言語を覚へさせなば早く本国へ送りて帰すべしとおもひて
申つけんとすれど少しばかりも習ひ覚へければ文字を二十字
横文字にて人々の名を始め書覚へさせたれど
然れども只初太郎といふ名の文字を書覚へければ家を
二日目ごとに衣類を着替させ初太郎よりも囲しくさせ
かへ食事などもその家のものにかはる事なく家内へも
召使ひ申さずかく愛するなりとて其志しが女子を申して

カリホルニヤ日本の東岸より百度計の隔なれは至極るなりかく云かるは是也東西相隔日本より熱帯の地形をなしてなり

地図経度の数を推せは内より外へ凡経度四百余とかいふ事是もサンロカの岬より新アルブの方へ山越に行を

初太郎に案内せんと思へるよしなるを又打くらて家にて（阿部殿と初太郎殿一所に寄せて勝国の武たかのくらいしもなりしと有り）
伴（トモナ）なれ鉄砲（テツパウ）にて兎（ウサギ）抔打に行しかとも此所にても雉（ホウ）
鹿（シシ）も日本よりも獲物多く土人の他にするは日本の鹿
る也地の形ちなど云ふ所にて凡カリホルニヤの地双方は
海にて東は内海の方はババカリホルニヤといひ西の方をア
リタカルホルニヤといふ其間の打越（ウチコシ）四十日路（チ）ほども有といふ但し
其ちかくは山谷険地（ケンチ）にて人家少き様なるべし城下を
メヒコといふ熱ての土地の広きに比（クラ）べて人家至て少し

松宮の四月中旬過（スギ）右はサンホセより出て凡三十日計を
歴て萬助の家を訪る人ラッパスといふ所へ帰るとて
此人もラッパスより役義にてサンホセへ来り居るが自用にて四月中に帰るよし（ラッパスはカリホルニヤの内也）人馬食物の用意し
萬助をも誘ひてラッパスへ帰りける又四五十日程歴て亦
熱助倍太助利三郎三人の家も立退き諸百姓伴の人
外に他所へ稼（カセギ）に行とて各一所に連（ツ）行て方々に傭（ハウ）れ
行るよしなるを初太郎七太郎弥藤太郎…の外
皆サンホセに留りて居る事凡三四十日経過（スギ）八月上旬に

邸宅家臣ミゲリチヨウヰ公用ありてイサトランと云所へ
行べきよし城下メヒコより書翰(シヨカン)来て申越しければ急ぎ
彼地へ行とて留主(ルス)を女子供(コドモ)ならびに従者初太郎に托(タク)し
并に妻子どもにも宜敷(ムネ)告げ船便をもとめてイサトランへ
行にはサンホセよりイサトランへ卯辰の方に海上四百里
も有といふ入海を隔(ヘダテ)て（地球全図(チキウゼンヅ)に見ゆる東紅海(トウコウカイ)なるべし）四百里といへども
船路左右なれども此国の人ハ大きなる海路知りて大儀
に思はぬ体にて五日かゝりて容易(ヨウイ)に渡海するなり

里数の定は近ごろ聞けばまちまちなり何れとも
経度の差によらば東
西の幅は四百里にも
足らざる事なし船路の
事なれば夫を渡る時の
差のおもむきを考ふべし
まちまちなるべし

来るは此後初太郎ミゲリチヨウヰの妻子の留主(ルス)
誠に大事にいたし暮し(クラ)たる四月中旬過(スギ)て相変の沙汰を
十月下旬より凡そ百日計もサンホセに居たりける此間雨
天降らず五月少し六月の内夕立雨度稲(イナヅマ)雷鳴(ライメイ)有て
八月に至迄風雨有事しのときなり

亜墨利加より便船を得て唐土広東へ渡りし
ときの話
ラツパスの船にはベロンといふ者有りて兼而サンホセへ来
時々来りミケリチョウサと親しく往来し初太郎とも懇
意なる者なりけるが十月の初め比初太郎ベロンの旅宿へ
参り従ひけるにベロン初太郎に向ひ其方日本へ帰国の志あ
是より初太郎答るに毎々何程旧里懐思ふの情勢しも忘れ

かゝる處へベロン〻日就した來て善助を呼けるへミゲリ
チヨウ井ラに云方様書付てせんとの志ある故かくの如く親家
なれば是を志ら何しても帰国(キコク)の話(ゴ)有べからん家常にシヤントランへを
船にて渡海(ワクヘン)するなれば彼地の船問屋へ寄り阿蘭陀(ヲランダ)船の折に
彼地へ来るなり阿蘭陀一艘(サウ)来りたるよし此の便り(ソヨリ)にて阿蘭陀(ヲランダ)
は日本へ通商(ツウシヤウ)する事なれば日本人を載せ帰国
させしに安からべし 先善助と一所に其話聞て帰るべしとて
ベロンより仏郎ラッパス(ロ)へ書翰(シヨカン)を送り善助が家

主へ遣し云う御申越し置き云う様ベロン〻船に善助
様の世話にサンホセへ伴(トモナ)ひ来らんを惣助伴と助利七郎
等ハ家主の此者に申して帰国を待らぬ故に九人集(アツマ)
りて評議(ヒヤウギ)し彼ベロンと共にシヤントランへ渡り事終
諫(ハカ)らんとこれ迄善助初太郎の両人を
別れて愛(アイ)せられし故言語(ゲンギヨ)なども能く通ずべし
七人の者は日々産業(サンゲフ)に付るゝ間言語未だ
なかなか少し惣他の海路大義なれ共両人渡りて宜く

五十日ばかりたちければ辞（コトバ）も揃（ソロ）ひければ有時一人罷越し
初太郎は善助が家との宅に伴ひ御頭家内の者へ
対しイホトラン一周年何事も法のごとく殊に口となく
咄しければ三ゲリチヨウサの妻子いかなる事にて御やと
問ふ初太郎彼地の様子をも見てみれば家とも急
ぎかれこれ善なる彼妻子も留（トム）るさへ継ぎてイホトラン
右熱（ジン）華（クハ）の地を慕ふぞ見苦（ミグル）しからぬ様にて三日計以前
数しき衣服様私くし製（セイ）し上此の食事ま

就（シユ）ての地産（チサウ）彼ちり善助も同じ家に逗留（トウリウ）して有けるが
十月六八九日比ベロンの船出帆（シユツハン）のよし告（ツゲ）来りけれど家内の母（ボ）子
おしき様子推（スイ）しはかる体にてこともや帰らざるかとみるん
からく名残（ナゴリ）を惜みて初太郎が手を抱（イダ）きしめて泣（ナ）き
其ほかその地の男（ナン）女（ニヨ）老（ラウ）少（セウ）貴（キ）賤（セン）のわかちなく深（フカ）く睦（ムツマ）
しき人々多くありて互（タガヒ）に手をとり抱（イダ）き合て
あるとかいふ様ミゲリチヨウサの子ども馬に乗又七人の者
も一同に浜辺迄見送りけるを初太郎も

助の商人をベロンの船に乗て見るに凡四百石積(ツミ)なるものにて
帆柱(ホバシラ)を弐本 乗組(ノリクミ)を七人ありて 即日(ソクジツ)出帆(シユツハン)して サンホセより
卯辰の方へむかひ艫(ハセ)行して天気宜しく風強(ツヨ)くなりければ
五日目に イサトランへ着(チヤク)しけるに 折節阿蘭陀(ヲランダ)船来り
今さで居りけるを ベロンを同道して 其所の領主(レウシユ) ホロ子ルや
いふ人の家に行て 彼船にのりて帰国いたし度よし頼
みける 彼人申けるは 亜墨利加(アメリカ)の内にも 折節は唐土(タウド)へ
便宜(ビンギ)はあれども 先今せ見合すべしとありけるが 其後程

其後外の所より當所の内に唐土(タウド)へ出帆の船ありと
そのかたへ知らせ来りければ 商人ベロンに向ひ サンホセ有
残せる七人の者を 乗等よりも 艱苦(カンリ)も多し 何とぞ一
所に連(ツレ)ゆきてくださるべく 云ければ ベロンがいふ 此地より唐土(タウド)へ
便宜(ビンギ)あるは 一年に一度か二年に一度なり 此船に乗
後(ヨリ)ては いつか帰らん其期(ゴ)知るべからず 其上海上四百
里もあるサンホセへ 七人の者を迎(ムカ)ひに遣(ユ)かば 往返(ワウヘン)日数(ニツス)
数もかかるべし 彼船にて迎ひに来るを待(マチ)てあるべきぞ 御(ニヨ)を

得がたき幸の便船(ジセン)なれば帰国に志あれども早くは乗(?)
渡るべし 七人同船するものなれど此度は(?)吹上浦をみる(?)
両人残(タジ)り今さら云ふ先祖の計もなく 恙(ツガ)なく帰国
しなば苦しの老年を告げなれば旧里(キウリ)の人々喜ぶべし
少しの義理ありて此便船に乗らば九人ともに
むなしく此国にて朽果(クチハテ)んかれもかくもなく心決(ケツ)し
先ず先祖の両人の渡海すべきを懇(子ンゴロ)に頼みけるに
義然として初太郎善助ありとて此地にとゞめ

亜墨利加にて銀壱(?)
多し 損(?)洋(?)を拾々
かけ目(?)ちとつくりて(?)
何ことも(?)あらず(?)

留まりて奉公に問屋のかたはら家に止宿(シユク)させられ
かくする所へサンホセの家より三ゲリ香らけ(?)先達るを
此地にあるしが此ものを見つけ厚く見なして軈(ヤガテ)居所へ
初太郎に向ひ我方帰国せずば我家にて(?)わびしく
我娘を妻(メアハ)せ銀を与へ分家して富貴にさせ一生
安楽(アンラク)に暮(クラ)さすべし 何とぞ此所にとゞまれと云しかど
初太郎申すは是までの月日の間の渇仰(カクサン)(?)恩の滄海(サウカイ)
山よりも深く 何みかく(?)念(?)留めんために(?)両(?)

ありくらしたる中にも老たる父母故国に残し置けるを何卒
帰りたく思ひしなど語り出すに皆泣き出しけるに
かくて歎(ナゲ)きけるをベロシも側(カタハラ)に在て此様子を詞(コトバ)添(ソ)へ
帰国させ給へとすゝめしかば三ゲリチョウ并漸(ヤウヤク)に納得(ナツトク)し
我船の荷物なりとて互(タガヒ)に手を取りつゝ抱(イダキ)合て名残(ナゴリ)を
惜(ヲシ)みけるとぞ凡此ヘサトランの地人家七百計り家の
様は何れも土蔵(ドザウ)造(ヅク)りにて屋根は瓦(カハラ)にて葺(フ)き多分(タブン)二階(カイ)三階(カイ)
の造(ツク)りなり軒(ノキ)を一町の間同じ様に揃(ソロ)ひ町幅(ハバ)も広(ヒロ)く

酒店には硝子(ビイドロ)の罎(トクリ)を多く並(ナラ)べ種々(シユグ)の名酒を貯へたる呉(ゴ)
服(フク)店には羅紗(ラシヤ)呉絽(ゴロ)服連(フクレン)なとさらさ木綿(モメン)の類を
かざりて其外肉店(ニクテン)なとも賑はし幟(ノボリ)なとも沢山(タクサン)
又所々に薪(タキギ)にする候なる湊(ミナト)の内広く外国船四五艘
繋(ツナ)ぎあるを時刻(ジコク)を知らするとて石火矢はなつなり　又サンホセ
つく 掛出所の問屋の主ベロシ也と両人語りつゝまて
此地の人家はめぐるを日本人は帰国せしむるの
迄(ソベ)に合力(カフリヨク)被下しみえ候を限り銀子拾枚あるひは

也三十枚抜群の豪家にては五十枚も貰ひ至都て一度
我も百六十枚計りの内百枚は船賃として彼船へ
渡し衣服なども少々調へ残り百四十枚は五人に与へ
帰国までの雑費にすべしとなれば三日目にはベロン五人
に暇乞してサンホセに帰るなれども其時五人は七太郎
はじめ七人の輩のかたは甚くこそありけれどもベロン
也往一時に雑用多くかかりけれは叶ひがたし便船の
無ければ二人三人宛追々に送り遣はすべしとて心よく
うけ合ひ彼の船にてサンホセへ帰りけるかの三ケ月余
七太郎は子のことは豪として恩義も忘れがたければ
又ベロンが五人は故郷へ帰さんとて懇くに世話せしは
信実なる志なれば誠に神仏の加護にてかかる善
心の人にもめぐりあひたるなるべし　さればこそ万里の
波濤は遠き日本へ帰らんとは思ひもよらぬ身の
くれ給ひける　かくして一サトランニに逗留すること五十日
壬寅十一月上旬彼便船に乗りて一サトラン港を出帆し

西の方に向ひ帆かけたり此船長さ十七間帆柱は本帆段
廿條ゟ弥帆三つかける乗組九人皆亜墨利加人なり唐土へ
買物に行く船なれば荷物もなく銀を多く積る
なり順風に多くの帆は何れも上げて船の速なる事
言語に及ひがたし又船は副船にも乗人多く常に
少しも事は不議し天文は考へ海路は測り船乃
運速は少しも寸たがはず常に順ひもなし若のさならん
識りの何時にても何方に欲何る所は通るへし何の刻まて

千古確言讀而到之
豈無遺憾

何処の方に山は見ゆるへしと云ふ事は二三日も前より
知りて識る千里の道は走りても遠く入る船なる時は寸と
も違はす而へ少しも違ふ事なかりし又往くの
道も只眼鏡なくて日輪は見て度数は測り今ゐて
此船何十何度何分の所に何里と云ふ事は陸海ひらかに
に知りしなり船中の人初太郎等に日本唐土日本
の船は山は見えざる時は方角に迷ひ寂ゆく船まて
道なき日は東西も知らず船は星は山ゆへ地に百里の海上

に漂ひては日と星とをさへ見失ひし程茫然として居

ける事ありしに、其時は雨降りて日と星とを見ざる時

方位を知らずして一向難儀にて、又洋中にていかなる風波有とも

ある時に大なる船にて陸をも見て職を得ん

事を為さんとしてかかりける二十四五年も過ぎて十二月下旬

と思ひし時此サンルイチといふ島へ船を着て一名を

ワホウといふ家居五六百軒も有る一サトランドといふ島まで

海上凡三千里も有りしと見へる

按ずるにサンルイチは地図に見へる サンドウイスなる島の和名

までワホウまでを一ツなる里数三千里と思ひけるに此程遥かなるべし 此所島五ツ有る人物賤しく

衣類もなく兼ねて女は唐棉なるを黥（イレズミ）をせしは自分

の外にはアロハアロハといふ（是は挨拶と国俗なり）其島の酋長なる者の

アメリカの人多くて少し西洋の風も有りアメリカより唐

土へ渡るまでの島々此島へ船を寄せて水を取るなり

此島は常船す十二月上旬サンルイチ

出帆し始めのうちは西の方へ向ひ乗行き程なく七年

も過ぎて癸卯正月となりて洋中にて年を迎ふ

廿二日土州の漁師三人目のぼりて思ふに其の艱難物語り類海の事を船を放せ(?)口傳 寛識

此所謂土州漁人ト云

即チ萬二郎等ニ〆
嘉永辛亥米[illegible]ヨリ
船ニ托シ琉球ニ到リ送
ニ薩摩ノ護送セラル
其顛末ハ別ニ紀事
アリ其紀中ニ亦ザン
トウイスニ在テ善助ニ
會セシ事ヲ述フ

マカヲ即チ香港
媽港

漸く唐土近くなれは海水の色濁りて[illegible]濁りける
而るに[illegible]沖にて唐土の漁船出て何れの地方と訊ねる
本船十里程なる所に帯[illegible]通ひ船[illegible]米薪水[illegible]を
送りよろしき[illegible]一サトラン[illegible]出したる凡七十日にして唐土
廣东の湊口園門と[illegible]所に着たり [illegible]国にてはカツと云 此處正月
中旬の事なり 善助は三日目に初太郎と共に陸へ
上りて[illegible]善助と一所に上りて[illegible]とも船にて
[illegible]築門を[illegible]六[illegible]と携ふて[illegible]午

板に縫付て善助は[illegible]なる丈にて端船にて陸へ
上りし女と[illegible]唐人数多集りて来りて色々と
尋る体なれと言語通せされは砂の上へ日本人
と書て見せけれは[illegible]ゐる事体ひ従て唐
人の体は皆頭の[illegible]剃て頂の髪を丸く結
し[illegible]落[illegible]衣服今長崎へ渡
来の唐人とかはる事なし此地人家凡五六百軒もあり
商家軒を並べてなかなか町幅も広く[illegible]体ひ従

亜墨利加人ニ少シ和蘭ノ風骨アル由ハ即チ共和政治州ノ人物タル事疑ヲ容ルベカラズ　寛呉

也ハ家ハ大家にして長さ二十間斗奥行も同し
殿にて中は家毎に二階ハ極張なり屋根に瓦を葺き
瓦葺なる家ハ二家にてアメリカの人なるよしなり何家
隣人の風なり就中此地の人物七分ハ唐人三分ハ和国
人のやうなり和国の商船二千余艘も往来して
繁昌なり天竺呂宋イキリス抔の諸国の人々も繁
細人天竺の人ハ面体唐人にかはりて頭に髪ありて
諸一條に諸羅刹の長き頭巾抔かぶり居る

丈ヶ高く身肥へ呂宋の人ハ国役なれとも天竺のかたち
あれハ万人に似たり其余西洋人ハ大抵一様なり又此
家に去る辛丑十月に漂流せる加州領能登の国鳳至
郡水月村の者船頭七弥三郎と申者二人又十ヶ年計以前に
漂流せる肥後の国川尻の者庄蔵寿三郎熊太郎などいふ
三人皆一所に住居せり

寿三郎ハ下叔人深
御一寺ニ命を英船に
助られ右郷ニ帰り伝へ渡
近日れ浦賀の津及ひ
薩摩の洋へ先達而
地方而ハ大砲を打発し
少れ炎の外にて船ニても
異てハ広東へ運ひ
長ク船にて英船の
役又上りて其趣和蘭
頗ル不渡来してのは

諸事と世話し茂
廣東ト称しける所
口傳 寛識

寿三郎ヲ護送セシハ英
船ニ非ス米利合衆国
ノ船ニシテ名ヲモリソン
ト云フ

漂流の始末を今ふ至る迄あらの
此節猶具ふその事を聞けれハいと委しく物語りて
初太郎ハ正月中旬に至り世の家にて在の人々と等しく同居し
今年ハ両様の服を致出して米魚肉の類を調のへ
自ら日本風ふ拵へて食し既に日本風ふなし
て是始めて国体様せし時まて唐ふ暮し多しとなる

京は此處にて唐も御座いたせし日頃も委しく
知るる又過日中ふ肥後の者ふ譲ぬと許く見物せるよ
往して見たさへ一向ニ無く佛閣は何處に何を何と日
本の黄檗宗の寺院ふ似たる鐵掛(シバ井)ハ何るて見物せら
本まを何ふ見けれ共何らさるにしなる宝芝居とてなく
而して一廻見物い依府ひく茶せる所の西へ本之ノなとヽ宏
おりもなく誰もみゆる見物なる男女の容ハ長崎の如く
高の誂図ふ少しもかはる事なけれ女子ハ足の小さ紀

ようする由にて幼き時より足を纏ひ大きく
ならぬ様にする故大人の足にても七八歳の小児のごとく
歩行も腰を折りて殊に見苦しき事なり同月
中旬より同月十日まで凡九十日程之間澳門に逗留
せり

廣東より香港へ護送せられし日本人漂流に依
同月上旬より此所より香港へ便船を以て渡る事を
容易に成り難く初太郎と同じく舟船にて同月
十日出帆此時肥後の者共は近来唐土と西
洋と戦ひの所なりしを見てアメリカより渡来し来
服従の数百持して兼ねて西洋の間者と疑ひ
此所に留め置かれ彼方へ送らるゝ者を差図に従ひて

たとく肥後の者共へりを熱て漂流人は和国へ
送り帰すに広東の評に差すれは官命に依りて陸
地を護送し広東より江西へ越え鄱陽湖を渡り浙江
いるけるを寧澳門へ着く時に寧波より福州まて
便宜次第舟にて送るなと定法なれとも此度船なるに
船にて乗組十人にて往来長崎まて見る舟に同しかれ
地方にて是も小さき事なれは漂流せし家東へ向ける乗組なと
十八九ありて福州の内厦門の澳の岸に舟かゝり居

と行程三百里余厦門と繁昌の地とききけと此島まて
人家は千軒計り日本まていふて番所を出て見へき侍し
寄せ滞船するなと去ル日五月上旬厦門より東北の方
へ向く乗出き三百里も来つる人と思ふ所にて舟は
繋く此所はチンモウといふ地勢東うけの湾洞にして
双方の山の崎に人家百軒程何れも漁猟を常の
業とするなり海なれは唐土の海邊都府皆瀬にして
山岸の前は何れ又沙濱も何れ山岳も見く見ゆ

彼国人等一国山島の名数へ候又様石なとも見候
陸近き所ゟ色々濁りたる海にて候 只嶋別の勝景
のミ淺る所ゟあるなり 五月下旬ニ至りしを 定海へ出
船ニ乗り十日 ミンポウと云所へ行く 按ニミンポウなるべし 寧波の事なるべし
此間も三百里ほどもならん 関門にてミンポウと云 風
九百里斗と覚え申候 此所ハ広き所なれとも 町幅は狭し
日本の大坂の如くに 縦横ニ堀切通し 運送よく自由
なるべしと見へたる 則上陸して 役人体と覚しき家へ

十日を経て近辺の是より先浦へ海上渡して僅ニ五十
里程なれとも 川舟まて送るなり 定てあるよし
同廿日寧波出立 川舟ニ 初太郎 独此の人外人 船頭水主
都合八人 組別ニ 警固の船ニ 役人も乗り来り
附添 案内する体ニ見へ 船の体細く 案根何里 川筋ハ
狭き堀川にて 左右ニ堤何里 川幅五六間 又ハ四五間
の所も何里 水を溜置る様にて 動くことも少し 在家ある
田畠連なり 米穀よく熟して体なり 風よく致し 村々

帆をかけ風向よき時ハ岩へ向ふて引き行くなり
以前ニ聳へ遠く見ゆる山共なし 同廿六日ホンチウ着船
此所ニ泊り ハンチウともいふ 即ち杭州なり 此所の役人来りてミンポウ
の役人ともへ同ク遣ス 閏七月 卯年唐土ニては七月ニ閏有りし 和一通り遣ス
此所人家大坂ほとも有りて 町の格子ニ簾ありてかけて
市中往来の節ハいつれも駕籠ニ乗る様ニ市店の飾
見得なく美しくも見え候 駕籠ハ左右後の三方板ニて 前ハ左右ニ窓有りて簾をかけ
前ハ茶括ニて乗りする者ニも簾 何れも厚くして美しく外ハ見えず 出行ときも見物人何方ニても

多し 同十日又川舟ニ乗り送られけり 前ニ同じ乍浦
迄の内 二ヶ所ニて改め有り 然れとも其地名を忘れたり
同十二日乍浦ニ着ス ミンポウより是迄二百里も有りしと
覚ゆ 私共是より直ニ駕籠ニ乗りて役人の家ニ行
則駕籠を下りて案内す 一時ほと待居る所
役人出来り中ニも重役の人と見へ小高き中央ニて
曲彔ニ掛り紋繻子の装束抔着し 玉の飾有る冠
戴き左右ニ下官十人ほと並ひて立てる通り

漂人出帆漂流の始末年月下通り致露西亜則ち
次第ハ漂流せし事終りて通詞付添ひ此家に
而へ連行る此家ハ奥羽の漂流人六人有りて是も
丑の十月ニ吹流されし辛苦ハ常ニ此而へ[illegible]
しとなん 伊達郡半田村十吉なる者の船の乗 仙臺
領の者三人 石の巻 石濱 寒風沢 三ケ所の者なり 出羽最上の者一人 南部領
の者老人初太郎ハ此会せて以上九人となる是ぞ一回
ニなりて日本へ渡る事を叶ひ今は心強く思ひける

去なから七左衛門始め七人の者ハ物のいはく一所なり
渇くるといかなる事も嬉しかりしも又居所かるも心元なく
覚ひ居り此所にての食事粥に魚を飯なり
二番作りの米なるよし至て下米なり菜廻り[illegible]
豆腐或ハ太刀魚大根の類或ハ煮付る物凡て此地ハ
乏しき湊にて人家一万軒に余りされとも日本の[illegible]
に比すれハ家居何へき様なり諸人群集する事[illegible]
能からなり寺院も多く何れも居宅広く有る中ニ[illegible]

日本の品を越来る唐何も煎海鼠昆布なとの價ニ替て
懸隔なり又ハ紙類傘漆木綿煙草煙管なとの
類まて日本の物多く商ひ九日八日ニなりて斯る也
善助本國ハ根子いゝ子ニ說出る二月中旬澳門へ着
丈重々此の海路ハ經て舟山ニ至る所ニ着ス今は
漸く此所ニいる事ハ述ふ初太郎ニ於て格別乃
艱難たなかりしニ唐人ニ添ひ格心細かりし事なる
次第ニ名主半六殿ニ歸りて共ニ便ひなる乍浦ニ留る

さて凡百三十日余間留りて一度ハ浴す又所目安ほ
の受取ニ必役人附添て御細ニ吟味ありて見物する
事能さハ扨十一月十六日ニ奧州の者五人善助長次
郎善右衛門重吉文蔵越源寶と云船ニ乘せて出
帆す同十三日ニ初太郎岩松次郎吉（出羽源之丞能登）
以上四人は永泰と云船ニ乘せて出帆す（然るに重吉病死せり）
乍浦逗留中ニ籠ニ來り木綿蒲團を借り舊綿入着物を
借りて其の物ハ此の給ひ葉莨幾ハ呉し候ふ

様より通詞中ゟ申されし由へ別當呼て相傳ふる
扨唐土の人をは暇を告け總て解て今浦の湊を去る
此船并但人數九十七人初吉郎なりし舩の梶なく
兼て聞しに居て言ふ自由なりしに湊を出てより
急なる風を見て名を告ても其の船は同しく流され
聞しても用いられ少しも數へは役人とも一向に
窺もせは是船はよりの云付なるよしなり六二百出帆
しては同晦日松半まて走りたる五島の山を見て嘆

船人共天へも登る心地せしなり翌十二月朔日船は
早山近くなりけれは都て唐船渡來の砌五嶋の山見
ゆる所にて鶏を殺し酒を呑て祝儀は
なせは帰國する者も唐土の山を見れは同じく祝儀をなす
なすとて此時も船中なる祝ひ喜ひて其人の者とも
共に酒盃を出へしなり十二月三日肥前長崎の
湊に恙なく入津す船を注奉行所の注進なしたる
揚屋へ入置ぬ翌四日に源窓船も入津して彼唐人

の類も一所になり〳〵三日目に立山は奉行所の白
砂に於て始めて漂流より本国へ到る迄の次第吟味
有之則亜墨利加より唐土へ至り澳門より寧波
杭州を経て乍浦にいたり唐船に乗り長崎へ帰りし様(?)
異国に在し踏絵と云ふ事も済たり（長崎の御役所にて絵板にていひ〳〵私共仏の像踏(?)　扨(?)に踏付ることの有(?)里本国へ帰るとの心邪宗門に入(?)るとなきとふ證拠に此絵板踏せするなり）其後も再三微細に
御番所(?)籠居の間御備(?)ひ〳〵鮮き(?)汁に香の物飯は魚
類の菜付 晩もの茶漬なり折々御役人来りて頓の

かくて何くれと差急なく申上たり 神祭なりとも調ふへし
と懇にや申さられしより日に三度ツヽ湯に浴し月代を
調へ衣服を改め居たり 此月下旬に至り申続(?)
しとて衣服の類被下けり 六月八日に各草物を枚帯(?)
其筋より被下さる 其余等級の衣服速に帯其筋(?)
手拭并傘下駄被下され(?) 官府の
御恵に浴し数年の辛苦も打忘れ喜びのさな(?)
ほとなく(?)旧里に帰り父母の顔を見るならんと心(?)

嬉しからんと楽しみに居りし処 既に今辰の年に移り
去る巳年より 秋七月廿五日に至り番の者の呼出しに
各の内何方より知らぬ者 法役人迠来り候て
者有る故 初五郎も召捕られ 一所に居りし者共 諸生国
の人なりし 並助と云ふ人と第一に近く定まりし
家への返ひなりしと 心の内に楽しみを居り 廿八日に
一同法奉行所へ出る時
法国より迠に皆々便船を待ち八月廿日法家に

来る巳四月廿一日
法国へ帰り着きたり

川邑。巴太温等の土人と同しく好て人肉を喰ふよって又墨
是可。孛露ホの土人ハ男女とも色白くして都雅なる
然も諸部の海濱を離れて遠く中央山谷の間に住る
土人ハ至て醜悪にして鄙陋なり往々裸體文身の者
何里初太郎か帰りしは船を寄せる珂徒意私の伐訶と
いへる處なるも口吻の周囲及ひ両耳に懸するに蝦夷
人の如く自ら称して娃那といふなりも蝦夷の俗に同
しきことなり又初太郎か唐まて参れる尾張の漂流人久吉

音吉なとの物語に彼等か流されたる小亜墨利加の内勃私通（ボストン）
の都の傍ろの地男女とも獣皮を衣服とし常に自らの小便
まて顔を洗ふ面色玉の如くうるはしきといへり

言語

亜墨利加の言語六種に何里墨是可に用ゆるを里墨是可
語といひ孛露に用ゆるを孛露語といひ伯刺西兒に用
ゆるを打爾額些語とし加刺哥印に用ゆる所を加兒哥
些語といひ以上の四種ハ至て古へより傳へたる語なり

拿羅甸語。都逸語の二種なり是を欧羅巴より伝ふる
所なりとて初太郎ハ瑪撒充蘭の土人より習ひ来るものハ欧
羅巴語の稍訛謬せるものなるへし　土人の初太郎に教て習はしむ
撒私得墨利加と亜細亜の瑪泥剌と欧羅巴の伊西把你亜
波尔杜厄私法四所にて云語を通すと云へとも果して余
能是を尽す事能はす今大略地名を挙て後来乃
考據に備ふ

天文

日　ソヲル
月　ルナ
星　イシテレイヤ
雲　ヌベ
雨　ヨベル
雨降　アゴワヨベル
雪　子ーベエ
風　ベントー
烟　ウモ
寒　フリユウ
熱　カロル
天氣　テンポ
晴雨何如（ヒヨリハドウジヤ）　テンポーボイノマロフ

時令

正月　イ子ロ
二月　ヘブレロ
三月　マルソ
四月　マルテス
五月　マアヨ
六月　フワニウ
七月　フワリウ
八月　アゴスト

九月 セイテンブレ　十月 ヲトヲブレ　十一月 ノビエンブレ　十二月 リシエンブレ

歳 アンヨ　幾年 クワントアンヨ　幾日 クワントジイヤス　今日 ヲーヲ

今夜 ノチ　明日 マンヤアナ　明後日 バサドマンヤアナ・　昨夜 アノチ・

前夜（ヲトヽヒノヨ） アンテアノチ　昨日 アヱル　前日（ヲトヽヒ） アンテアヱル

地理

地 テラ　山 モンテ　川 ロウヨ　濱 プラヤ

島 イジラ　嶼（ミナト） ポエビロ 國ト云ニモ用ユ　街衢（マチ） カイヱ　石 ベーテラ

白田（ハタケ） グヮリタ　潮 マル　火 ルンベリ　水 アゴワ

山中 ランチウ　塵埃（ホコリ） ポルボ

人倫

國王 プレシデンテヱ　父 パヽ　母 マヽ　兄姉 アントヲニ

兄弟 ヱリマノシ　相公（ダンナサマ） セニヨール　夫人（ヲクサマ） セニヨーラ　少婦 セニヨリタ

男 ヲンボレ　女 モヘリ　児童 ムチヤチヨ　我児 イホ

婢 コシ子ル　官吏（ヤクニン） カンピンテン　人 ヘンテー　宰官（ブギヤウ） コロ子ル

銃卒（テツポウモチ） ソルダド　工匠 カリピンテヱロ　船頭 カンピンタン　副船頭（ワキセンドウ） ピロト

舵公（トモアヅカリ） ヨントラマヽリントロ　水手（カコ） マリ子ル　炊者（カシキ） コシ子ル　老人 ビヱホ

美人 ボニモソ　小生（ワタクシ） ミイ ○ミイヨー　足下（ヲマヱサマ） ウスラシ　汝（キサマ） ゴヲ

病人 インフヱルヽ　懶惰人（ナマケモノ） フロホ　爛酔人（ヨフタンボ） ボラチヨ　貧人 ポブレ

破落戸（ドウラクモノ） シシボル ベイサン　長大人（セイタカキヒト） アルト　肥大人（コヱタルヒト） ゴルド　痩人（ヤセタルヒト） フラコ

癡人（アホウ） トント　聰明（カシコイ） カベサボイーノ　義兄弟（キヤウダイブン） アミイゴ　朋友 コンパン吾

聾者 ソルド　盗賊 ラダロン ○ラレロン ○ピラツタ　姦夫（マオトコ） アカゴヱテ

身體

頭 カベサ　髪 カベイヨ　眉 スヱハシ　眼 ヲヽホシ

鼻 ナレイシ　口 ボカ　舌 レングワ　齒 レイテシ

耳 ヲレハシ　顔 カラ　髭 パルパ　剃髭 パルパコルタル

手背（テノカフ） マアノ　指 デドシ　肘 コド　足 ピヱ

膝 コスティヤ　腹 ペチウ ○シトヽゴ　尻 ナルガシ　腫物 ガラノ

血 サンギレ　頭垢（フケ） カスカラ　心病 ペチウドレル　乳 チヽ

男陰 パロマス ○チン　女陰 チガル　小便 ミヤド　大便 カヾタ

動作

歩行 パシヤル　走 コ子ル　徐々（ソロソロ） ポコノヽ　着（キル） ポ子ル

往 バモス　返 ボリベル　沈思（シアンスル） ペンサンド　呼喚（ヨブ）（ヨンデキル） ヤヽル

疲倦（タビレル） カンサド
囈語（子ゴト） ソンニヤル
喜住（ウレシカツテヲル） コンテント
疼痛 ドイレ

縛（モツル） アミフ ○ボリク
頑要（アソブ）（ナクサム） ヨヲガル
好愛（スク） ケレル
好性情（コヽロノヨイ） コヲソン ボイノ

食 コメル
飲 ○トマル ○ベル
空腹 アシブレ
戯舞（ヲドリ） バイラル

截断（キル） コルタル
棄擲（ステル） テラル
寐 ドロミル
眠 ミヤド

起（ヲル） 子ヲジタ ○子ヲバンタロウ
敲（タヽク） ベガル
観 ベル
聴 ヲイル

動作（ハタラク） タバラハル
収拾（トリカタヅケル） ワリ乄
交易 カンビヤ
責 ベンデル

買 コンブラル
怒 ノバト
泣 ヨヲル
歌 カンタル

裁縫（シタテル） コセル
婚 カサル
相親（ナジム） ノビヤス
習学（ケイコスル） ブレンデル

寫字（モジヲカク） イシキルベル
釣魚（ヲ） ペシカドル
踞坐（コシカケル） センタ ○センタル
死 ムリヤウ

洗 ナバル
交媾 チンガ ○チガルン

言辭

見人叙寒暄語自朝至午 ボイノジイヤス 猶曰好日子（ヨロシイ日）
自午至晩 ボイーノタールデ 猶曰好晩景
夜則曰 ボイーノノチ 猶曰好夜色

問起居語 コモレバステン
甚敬則更加一語 ハラセビススステン
好来 パステン
請進来 パヨエステン

請坐（ヲスハリナサレ） センタル
多謝（アリガタウ） カラシヤシ
多謝欠侍（ゴチサウデゴザリマシタ） ボンプラベイチヨウ

不好意思 ボルベインサン
請恕（ゴメンナサレ） コンスペリミサ
請恕罪 ウステン シペンサ

大家（ミナノ） トウゲ
多多致意（タントヨコトヅテヲ申シタ） ムチウサウウデス
拝懇（ヨクタノミ申ス） レコメンダル

告別辞（サヤウナラ） アリヨス　請慢（チツトシテ） イシペラ　當重来 アスタ名アゴ　少時来（モナツトシテヘール） ロヱゴベテイル

那里去（ドコヘイク） ヨンテバモス　今將往（イマユキマセウ） イヤボヲイ　請借火（ヒヲカシナサレ） プレシテ ルンベリ　不要（イヤジヤ） ノケヱリ

乞物辞（ノダサレイ） ダメ　與物辞（ソリヤヤラウ） トヽ　呼人辞 ベナカシ　應辞（ヘンジ） ベニステン

知否（シツテヲルカ） サベ　不知（シラヌ） ノサベン　虚語（ウソ） メンテイラ　勿言（ダマレ） カヱタボカ

罵辞 ペンデホ　甚罵辞 カラホ　尊称 日那サマトモシトンセヨールトモ ドン　始 プリメル

速 テンプラノ　近 セリカ　遠 レホシ　强 フヲリテ

美（ミゴトナ） フテシコ　好（ヨイ） ボイノ　悪（ワルイ） ベーロウ　姸（ウツクシイ） ボニト

醜（ミニクイ） フヱヨ　多 ムチウ　少 シウヒ　大 ガランデ

小 ボキト　細小 チキト　有 セアイ　無 ノアイ

高貨（ヨイシロモノ） ヱシテボイノ　低貨（ワルイシロモノ） ヱシテマロウ　高價（タカイ） カロ　賤價（ヤスイ） バラト

幾何（イクラ） クワントヲ　有幾（イクツアル） クワント セアイ　可憂（ツライ） テレヱシテ　可愛（カアイラシイ） ボニト

可憫（カアイサウニ） ボフレシイト　用心（キヲツケヨ） クイダル　破壊（ワレル） ロンピヨ　毀壊（クダケル） ケビロン

燒毀了（ヤケテシマウタ） ルンベリ ケビロン　熱的（アツイ） カリヱントヲラ　同的（ヲナジコト） ロミジモ　失了（ウシナウタ） スツペルデヨ

細軟（ヤワラカナ） ヒノ　言語（コトバ） アフブル　足下幾歳（ソナタハイクツ） システン クワント アンヨス

名做什麼（ナハナニトイウ） ノンボレ コモセヤヽ　幾日開船（イツゴシユツセン） クワント ジイヤス セバン

飲食

蒸餅(ムギノコノムシヤキモチ) パン　酒 ビノ　焼酒 ワガラ レイテン　米 アロス 又飯ヲモ云

茶 テヱ　水 アゴワ　熱湯 カリヱンテ　玉黍薄餅(タウキビノセンベイ) トルテヤ

醋 ビナギレ　脂(ケダモノノアブラ) ヘンテカ　羊酪(ボウトレ) ヘンテキイ　酥(カアズ) ケソ 製牛乳成乾塊者

油 アゼイテヱ　煙草 タバコ　紙巻煙(カミマキタバコ) シガル

捲煙(マキタバコ) プロ　吃煙(タバコノム) タバコヱツパル

塩 サル　肉脯(シシノホシモノ) カルネ　黒糖(クロサタウ) パノチヤ

白糖(シロサタウ) シヨカラ　氷糖(コホリサタウ) ペヱデラシヨカラ　香氣(ヨキニホヒ) ボイノウヲイル　臭氣(アシキニホヒ) マロウヲイル

衣帛

衣服 ロツパ　帯 フワハ　襦(ジバン) カミシヤ　襠心(ソデナシ ナカギ) チヤレコ

表衣(ウハギ) チヤケタ　額笠帽(ヒタヒニノキアルボウシ) カチチヤ　周笠帽(マワリニノキノアルボウシ) シヨコブレロ　襯褌(シタギモヒキ) カリソモヱヤ

褌(モモヒキ) バンタロン　屨(クツ) サパト　鈕釦(ボタン) ボトン　手巾(テノゴヒ) パンヨ

褥(シキブトン) コチヨン　毛布単被(ケオリノヒトヘブトン) アブレサダ 又 サラウペイ　絨褐(ウシロハイ ケオリノモノ) ウナ

絹帛 セダ　麻布(アサ) リノ　木綿布(モメン) アルコトン 又木綿ヲモ　線(キヌイト) セダデイロ

麻線(アサイト) リノデイロ　木綿線(モメンイト) アルコトンデイロ　裁縫(シタテル) コセル　赤色 コロラド

黒色 子グロ　白色 ブランコ　黄色 アマリイヨ

器財

劍 サビレ　銃(テツパウ) イシコペタ　大礟(イシビヤ) カニヨン　斧 アチヨ

鋸 サロチヨ　行李（ニモツ） カルガ　書籍 リビロ　帚（ハキ） コバ ポイシコバ

樂器（ナリモノ） ムシカ　四絃樂器（イトノヨスヂアルナリモノ） ビタクウ　剃刀（カミソリ） ナバハア　庖刀（ホウテウ） コテリヨウ

針 アグハア　筐 カホン　卓子（シツポクダイ） メサ　睡牀（子ドコ） カマ

榻（コシカケ） セイヤア　枕 アルモダ　麻索（ホソビキ） メカテ　石鹼（サボン） ハボン

板 タブラ　薪 レンニヤ　烟管（キセル） ピイパア　鎖（ジヤウ） カンタ

鑰匙（カギ） ヤミ　剪刀（ハサミ） テヘラ　櫛 ペイ子　紙 パペリ

角牌（カルタ） バラハ　囊 ボリサ　熨斗（ヒノシ） ピランチヤ　壜（トクリ） ボティヤ

小刀 コリタクル六　小杷（チイサキクマデ） テ子ドル 飲食之具　匙（サジ） 同上 コチヤラ　水盥（ミヅタライ） バソ

沙鉢（サハチ） タサ　蠟燭 ベラ 以蜜蠟牛油鯨油製　燭臺 カンデ子ロ　金 ヲロ

銀 プラタ　大銀錢 ペセタ　小銀錢 メリウ

舟船

三檣大舶（三本バシラノ大フ子） フラガタ　双檣舶（二本バシラノ子） ベリガンテ　双檣小舩（二本バシラノ小フ子） ベリガンテ ゴレタ　單檣小舩（一本バシラノ小フ子） バランダ

舟 バリコ ブケ　大艇（ヲヽテンマ） ランチヤ　脚艇（テンマ） ボテ　舵（カヂ） リモン

錨（イカリ） アンカラ　抛錨（イカリ入レ） アンカラ ヨンドヲ　帆 ベラ　帆檣（ホバシラ） パロ

舟旗（フナジルシ） バンデヱラ　飯鐘（ハンシヤウ） カンパン 掛在船尾　乘舩 アボルド　開帆（シユツパン） セバン

居室

家 カサ　内 アバホウ　中間(ナカノマ) ゼントロ　井 ポソ

樓 タルパンコ　厠 コムン　戯場(シバイ) コメリヤ

動物

馬 カワヨ　長耳馬(ミナガキムマ) 騾 マチウ　驢(ウサギムマ) ボウ　駱駝 カメイヨ

牛 バカ　豕(ブタ) コチ　綿羊(ムクヒツジ) ボレゴ　粗毛綿羊(ケアラキムクヒツジ) カブロン

羊 チボ　鹿 ベナド　猫 ガト　山猫 モンテガト

虎鼠 小獣似虎 アリディイヤ　四足 クワドロパタ　獣乳(ケダモノノチチ) レチ　雄鶏 カヨ

雌鶏 ガイナ　吐綬鶏(カラクン) ワホロテ　鶩(アヒル) パト　鴿(イヱバト) ハロマ

魚 ペシカウ　蝦(エビ) カマロン　海鰌(クジラ) バヰナ　蛇 クレビラ

蜥蜴(トカキ) カギヨロン　蚊 サンクウドウ　蜂 ピタチ　蟻 ヲリミイガシ

虱 ピヨホ　蛆(ウジ) グサノ　卵(タマゴ) ゴヱボ

植物

玉黍(タウキビ) マイス　蒲萄 ウバ　甘蔗(サタウノキ) カンヤ　蕃藷(サツマイモ) カモテ

南瓜(ボウブラ) カラバサ　西瓜 サンデヤ　甜瓜(マクハウリ) メロン　荻蘆竹(タウヨシ) カリソ

蘓木(スワウノキ) ブラシイル　小菓似鬼燈大 トマテ　同上微大 キトマテ　小菓如小茄大味甜美 イゴ

小菓似枇杷而長味甘 シリボイラ　小菓似烏柏実 ワモチ　菓樹似覇王樹 ピタヤ　芭蕉實 ピラタノ

數量

一	ヲウノ
二	ドウシ
三	テレイシ
四	クワトロ
五	シンコ
六	セイシ
七	セイテ
八	ヲウチヨウ
九	ノヱベ
十	ゲイシ
十一	ヲンセイ
十二	ドウセイ
十三	テレイセ
十四	クワトルセ
十五	キンセー
十六	リツセイシ
十七	リツセイテ
十八	リシヲウチヨウ
十九	リシノヱベ
二十	ベンテン
二十一	ベンテンヲウノ
三十	テレンタン
四十	クワレンタン
五十	シンコインタン
六十	セシンタン
七十	セテンタン
八十	ヲチヱンタン
九十	ノベンタン
百	セントウ
二百	ドセントス
三百	テレイスセントス
四百	クワトロセントス
五百	キ子ントス
六百	セイセントス
七百	セイテセントス
八百	ヲウチヨウセントス
九百	ノヱベセントス
千	ミリ
千一百	ミリセントス
千二百	ミリドセントス
千三百	ミリテレイスセントス
千四百	ミリクワトロセントス
千五百	ミリキ子ントス
千六百	ミリセイシセントス
千七百	ミリセイテセントス
千八百	ミリヲウチヨウセントス
千九百	ミリノヱベセントス
二千	ドウシミリ
一万	ゲイシミリ
二万	ベンテンミリ
一尺 當日本曲尺二尺寸	ヲウノパラシヤ
一里 以六千四百尺為一里	ヲウノレンゲワ
小銀銭一枚	メリウ
仝上二枚	ウンリヤアリ
仝上四枚	ドウリヤアリス
仝上六枚	テレイシリヤアリス
仝前八枚	クワトロリヤアリス
大銀銭一枚	ベセタ

角里伏尓尼亜ハ今ハ合衆国ニ入リ蔚然タル一大部ニメ金ヲ産スル夥多ナリ寧ロ天下ニ比ナシ欧洲ノ人民輻湊シ金ヲ堀ルト云其豊盛可想恐ラクハ又昔日ノ面目ニ非ス

亜墨利加の語何に寄らず多く発語にアの字を加ふ
たとへば川をロウヨといふ雨ふりて潦水流出て
川のごとくなるをアロウヨといひ椰をノチといふ蛇杯
のごときをアノチといふがごとし多く過去に属するなれ
にアの字を加ふるにや

飲食

初吾師が滞留せし角利弗尓耳にては墨是可に属して
伊西把你亜の開きし所なれば全国暦数千六百年（慶長五年）

◯突さしたる実又和の刺なかりしかば落るなれば既に熟す
庖丁にて刺を去て落し肉の内をとりて食ふ
一 イゴといふは葉細にして太なる樹なり実は小さき
茄子のごとく色は紫なり熟して実の皮をとりて味甘し
是を乾せば串柿の味のごとし
一 ワモチといふは葉は櫁の大さにて枝茂りて結ぶ
実は鳥柏の実なり少し大きく熟すれば自ら裂
て割て甘し味格別なりされども多きは小児

なしといふなり

一 シリボイラといふ物は金柑のごとくにて長し山中より
深山なる樹を少し揺動かせば熟したるもの自から
多く落るを拾ふなり味甘し

一 リモンといふ物は酸橘(スダチ)に似て少し長し味甚酸し
是をしぼりて肉の肉或は去り皮のみなる或は細く切て
砂糖に漬置き食後なとに食ふなり

一 グヤボといふ物は皮の色梨子によく似て長きと丸き

一 角牌(カルタ)の戦といふはバラハといふ此戦或して遊ぶことを
バラハフヲガルといふ牌(フダ)の数は四十枚ぞなり常に作り
赤く染紙の模様は模様して花と人物と或画
なと書くなり大抵日本の花合せといふもののごとく模様
或は合せて取るなり牌(フダ)に貴賤(ヨシアシ)の印あり四人メサの
上にて四角なる圍をして取る勝負にて輸贏(マケカチ)を決(ケツ)す
或時は各對坐して取る牌(フダ)を取合して数(カゾ)へ
四人は組になりて勝負をするなり牌(フダ)或は幾せ合す

は日本のめく堅して切られ横して隠くよ
さうちとま仕合すまし

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一 [illegible]

[illegible]

手足弱しき花布抔出て床の足の前迄て座候
飾候ハ手足白き木綿の草蒲団抔出て揉候
事なんとかりにても汚れ候ハゝ洗濯するなり
又ハ上よりも羊毛にて織る草の蒲団抔出る病家
或ハ貧家なとの時ハ腋床の前ニ幃抔座る也
尤腋床ハ人の事にて兎角見とも病人の心得へき為ニ
餘計ニ設け置る律ハ見へ候ハ是ハ土風にて杯の事時ニ
石火矢の音抔致す時分更来居る人いらさるの用也

何里ても早くかけつけ陽気抔なし此時ニ又
石火矢の音すれハ皆々門戸抔立て内すなハちにて
何れも親しき中にても人の家へ止宿する事ハ無之
候ハゝ也

一 産婦の間ニハ好を以産婦ニさし障く候ハゝ猶更
其の他なとく喧騒の様子出入の口抔脇けるとも有之候ハ
手口有 帳簾抔かく著候抔する許にて下屋又ハ
等屋ニしたるも何里 蒼椎子也の物なく皆備て

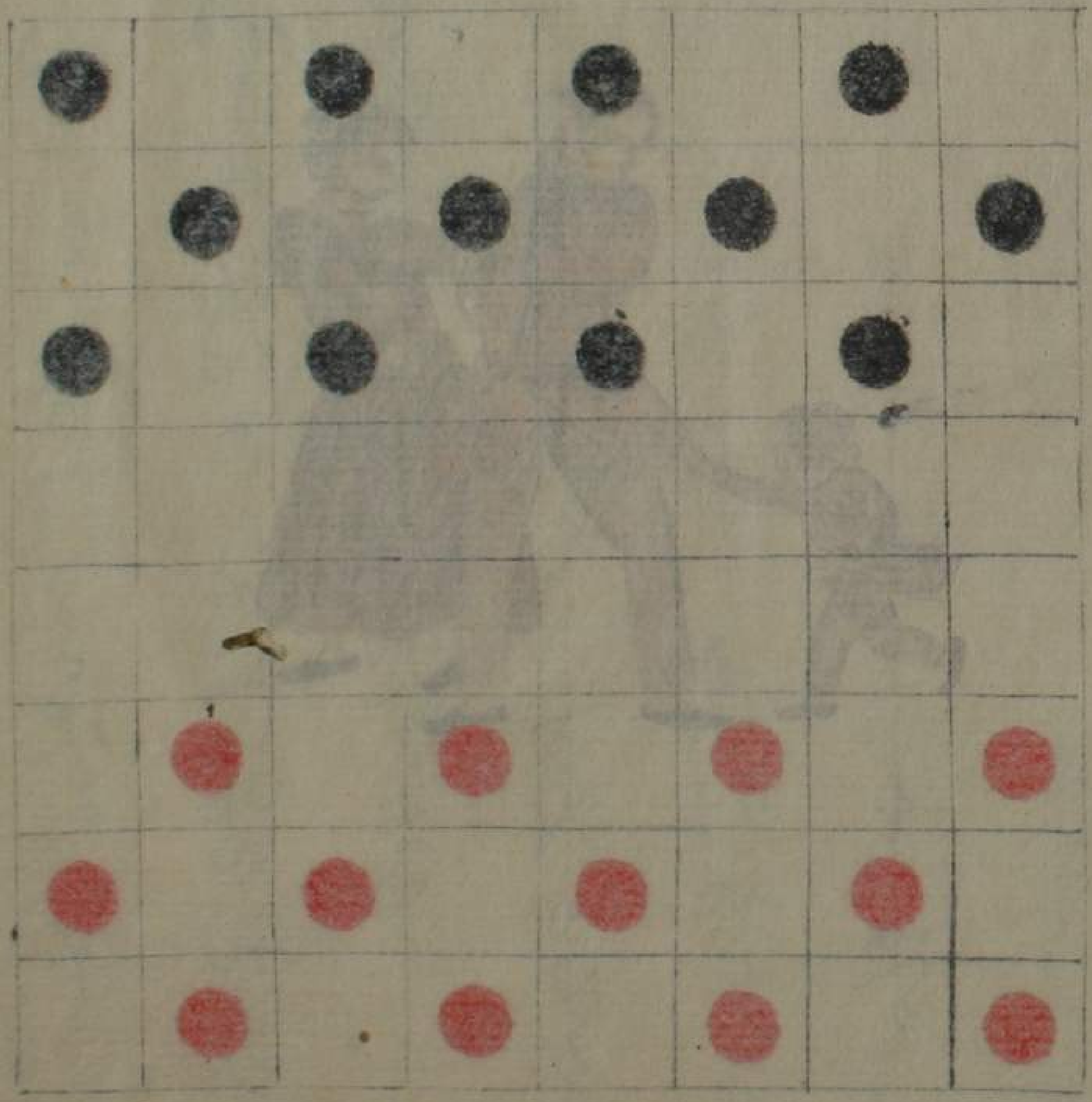
蕩るなる井戸厠なとはさしてかはる事なし凡て
暖寒の地なる故浴する事なく浴室といふへき
所もなし
一 物数商ふ店は呉絽毛織は羅紗類猩連更紗木綿
なとありて何れも縮緬(チリメン)緞の類は甚少し 酒店は硝子
の瓶を多く並へ葡萄酒アラキ焼酒甘蔗酒の類を
売る肉類魚類売り又はパン餅売る店なと多し 薪店
は見あたらす是は山近き所由へ諸くより来るなる

尚し肉野菜の類なと日本のことく拵ひ(テナ)何そきそて
売るものはなし
一 平生は器皿又は家事調理の器物椀なとも等しく
くメサとふ茎の上にて洗浄をかへく洗ひて出し置なと
又枕具は臥床の上に二つも置き烟草は或は閑にて煙管を
かけ時としては燭台をメサの上に置くのみにて紙燭の類
もなし寒にして一切の道具も少き様子家の内に押入
なとは甚少し 衣類はカポンとふ皮張の櫃の様なる物

は盤に墨きニ書物ニ柳板ニ重ね字横にしてなるへ
何けたる盤也

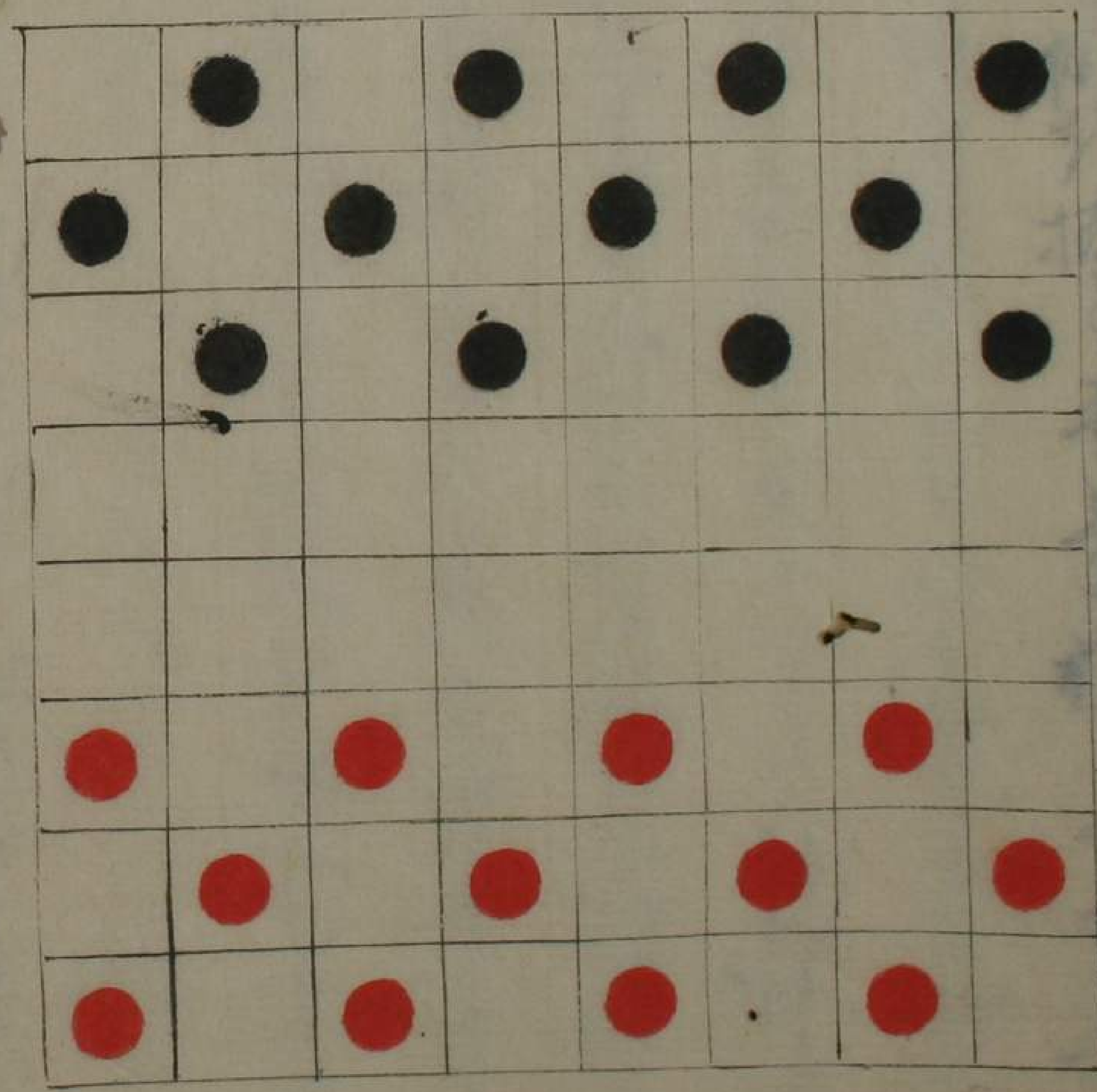
[illegible]

[illegible]



[illegible]

既ニ陞る子(コニ)ハ却行(アトジサリ)も許すなりかくの如くして
敵の子(コニ)越ゆること
ある故備とする
なり
若敵の子(コニ)を 図の
如く越る時ハ赤の
子(コニ)右より左へ飛越候ハ
花越とて二ツ越ゆる



遏八郎人物之図

なり小児五六歳の時より常に馬をひかせて乗らせ故
馬術に至りても女なりとも自然と能く上手に乗るなり
馬の鬣を切揃へるなりて日本に同じ下後の尾をても
少し寄き所へ行ても必馬よりのる徒(カチ)にて云ふ事更に
なし女も鞍の上に横向になりて乗るなり
一婚姻の礼を婿と嫁と互に向ひ立て其一筋の細き緒
長さ七八寸計なる紐輪にして首引するなり両人の
頭(クビ)へかけ男の戒指(ユビガネ)と女の戒指と結ひ一ツくゝりひり

惣て飲食する時にハメサと云ふ高き臺の上に沙鉢を献る
我國の人ハ疊に跪して食す若我國のことくなく坐して
揃へる庖丁と匙と小さき熊手のことき鉤テ子ドルと云ふ物を我
銘々の前に置き自身に切りてテ子ドルに突さし食ふなり
塩ハ南亜墨利加の内極て炎熱の土地は海潮太陽にて
蒸発せられて自然に沙土の上に凝りて生しるを取
取ると云ふ其質極て細にして滷気（ニガリケ）なく味至て醎い
ビナキレと云ふ醤油味噌の類ハなし